

## 卓越大学院プログラム現地視察報告書(令和4年度)

卓越大学院プログラム委員会

機 関 名	京都大学	整 理 番 号	1811
プログラム名称	先端光・電子デバイス創成学		
プログラム責任者	杉野目 道紀	プログラムコーディネーター	木本 恒暢
<p>1. 進捗状況概要</p> <p>本プログラムは、コロナ禍、大学院を取り巻く環境変化、大学経営の変化の中、関係者の努力によって計画通り進捗している。中間評価における以下の3点の留意事項に関する進捗状況は以下である。</p> <p>1) 社会的な課題解決に関する育成が不足している点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・社会課題に関する座学 e-卓越「社会システムセミナー」の新設および産官学連携講義の開講、また実地における経験を積む機会を与える連携機関フィールドプラクティス、学生に研究費を提供した自主研究等が設定されており、これらを連携育成により社会課題解決に関する育成の強化が見込まれる。</li> </ul> <p>2) 本プログラム趣旨が学生に十分伝わっていない点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・JSPS でのアンケート結果とプログラム関係者との認識のずれ等について、その後個別に意見聴取や独自アンケートが行われ、改善策がとられている。今回の学生インタビューでは、大きな食い違いは全く見られなかった。また、学生等からの意見を聞く窓口も設置されており、履修学生間の交流の場としての e-卓越カフェも運用され、学生からも好評である。本プログラムの趣旨や施策の意図なども学生に伝えられ、学生の意見の反映等が着実に行われている。</li> <li>・e-卓越カフェ等コロナ禍でバーチャルなものとして運用されてきたが、今後対面型になって学生が領域を超えて自由に集まる場所として発展することが期待できる。学生が自主的に交流を深め刺激し合うような環境の充実を望む。</li> </ul> <p>3) 本プログラム受験者数を増加させる点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・要因が検討されいろいろな施策が考えられ実行されており、5年一貫プログラムとしての受験者(修士課程1年)は低調であるが、DC1からの履修者数は徐々に増加している。これらの施策の試行錯誤は、しっかりした受験者数の増加を生み出すものと期待できる。</li> </ul> <p>【大学院教育全体の改革への取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・卓越大学院プログラム、博士課程教育リーディングプログラムにおける学位プログラムの大学院共通教育、学外との連携等が大学院教育支援機構を設置して推進している。</li> <li>・現在は、これら事業で構築した学位プログラムだけであり、本事業も含めた各プログラムでの実績・経験・課題等をもとに新たな全学横断型大学院教育プログラムが構築されることを期待する。</li> </ul> <p>2. 意見(改善を要する点、実施した助言等)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全体を通して、本プログラムとしてのカリキュラムや体制等非常にレベルの高い優れたものである。そのために、あと2年間の事業期間においては、このプログラムをど</li> </ul>			

のようにアウトカムにつなげるかを重点的に推進することを期待する。例えば、大学院改革ではこれらの事業の成果を活用した新たな全学横断型大学院教育プログラムを新設する等、学生の育成では本プログラムの受験者数が定員を大幅に超える、卒業生の採用を希望する企業数が増加する、大学や関係企業以外で活躍する学生が増える等が考えられる。

・各項目の助言等は以下のとおりである。

1) 社会的な課題解決に関する育成が不足している点

- ・「社会システムセミナー」等で概観した社会課題を各学生（グループでもよい）が実地に掘り下げ新たな展開を生み出させるような機会を検討されたい。
- ・学内メンターは十分整備されているが、上記連携を通して産業界等の異なるセクターからのメンター等の連携を検討されたい。

3) 本プログラム受験者数を増加させる点

- ・志願者が増えない要因は多様であるが、数学専攻では、入試の改革によって大幅に志願者数が増加したとの報告もあり、ぜひ各研究科や専攻等の学生実態をもとにした施策を検討・実施されたい。